泉原番神講社

泉原番神講社は泉原山蓮昌寺境内に鎮座する番神堂の信仰を中心とした青年団で、発足以来三百余年を経る今日も活動を続けている、近郷稀に見る青年団体です。

１．前　身

正確な記録に乏しく明らかでないが、寛文二年（1662）に蓮昌寺境内に番神社が勧請され、さらに元禄十年（1697）８月１０日、天照大神が合祀された。以来、８月１０日を祭日として、秋の祭典を行うことになり、祭りを賑やかにするため若者たちにより、祭り講が組織されたのがその前進ではないかと言われています。

２．発　足

明治２７年に規約を制定し、泉原番神講社と改めて発足

番神宮を信仰する祭り講として組織されたのが始まりだが、それだけではなく、地区の団結融和と発展のため尽力する青年団体（満１７歳～３５歳まで）として活動を行う。

３．発足後

明治３７年８月日露戦争の出征家族に農業手当金を寄付

明治４５年に霊山青年会が発足することになり、番神講社は第７支会として青年会と合体となった。

大正８年３月に社則を改正し、番神講社と改め、事務所を蓮昌寺に置く。

大正１２年９月１日に関東大震災の被災者に対し救助金を寄付

４．転換期

戦後高度経済成長、生活の多様化が進み総会等への出席率も低下して、昭和４４年以降、実質的な活動ができなくなった。

昭和５２年に地区民の協力と蓮昌寺の後援により、番神講社の再興に乗り出し、番神宮の祭典を寺の十三講と当時に執行することとして、泉原地区青年９３名を結集して『番神社祭礼』を行い、全く新しい企画で楽しい祭りとなり、番神講社再興の契機となり、現在に続いています。

（故菅野貞蔵さんが書き残した『泉原番神講社について』より）

（平成２３年１１月２０日十三講祭礼）